

では、**マタイの福音書 17 章 24 節から 27 節**を今朝のテキストにしたいと思いますので、お開き下さい。新約聖書の一番初めの福音書です。早速その箇所を通してお読みします。『²⁴また、彼らがカペナウムに来たとき、宮の納入金を集める人たちが、ペテロのところに来て言った。「あなたがたの先生は、宮の納入金を納めないのですか。」²⁵彼は「納めます。」と言って、家にはいると、先にイエスのほうからこう言い出された。「シモン。どう思いますか。世の王たちはだれから税や貢を取り立てますか。自分の子どもたちからですか、それともほかの人たちからですか。」²⁶ペテロが「ほかの人たちからです。」と言うと、イエスは言われた。「では、子どもたちにはその義務がないのです。²⁷しかし、彼らにつまづきを与えないために、湖に行って釣りをして、最初に釣れた魚を取りなさい。その口をあけるとスタテル一枚が見つかるから、それを取って、わたしとあなたとの分として納めなさい。』

今、**24 節**のところから目を戻して頂いて一節ずつ皆さんに解説していきたくと思います。“宮の納入金を集める人たち”というのは、これは当時ユダヤ教の本山であったエルサレム神殿のことを言っています。で、そこで神殿税というものが徴収されるんですけども、その宮の神殿税を集める人たちがペテロところにやって来たわけです。このことは旧約聖書**出エジプト記 30 章**にも実は規定されているひとつの律法・法律であります。**出エジプト記 30 章**のところには、ユダヤ人の 20 歳以上の成人であるならば、必ず“**贖い銀**”という、これは神殿税に後になるものを主に捧げなければならないという規定があります。具体的には一人当たり半シケルという“**贖い銀**”を神殿税として納めるというところが、**出エジプト記 30 章**に古くから規定されていたわけです。で、イエスの時代もそのことがエルサレム神殿において適用されていたわけです。で、実際にイエスの時代の宮の納入金というのは、今テキストところに新改訳聖書ですと小さな*印が付いていると思います。**マタイ 17:24**の“**宮の納入金**”というところには、欄外を見て頂くと直訳として『**2 ドラクマ**』となっています。これは貨幣の単位ですが、**2 デナリ**という単位にも換算出来ると注意書きとして記されております。当時は **1 デナリ**というのが大体平均的な労働者の **1 日**の給金でありました。ですから皆さんの **1 日**分の給金を今想像して頂ければ良いと思います。で、それが **2 デナリ**、または **2 ドラクマ**ということなので、大体平均的な労働者の **2 日**分の賃金、これが **1 年**分の神殿税として徴収されようとしているわけです。少なくともペテロとイエスはそのようなお金を持ち合わせていなかったということがまずここに分かります。後で見れば分かりますが、彼らは持っていませんでした。家に行ってもありません。懐の中も財布の中もこのような **2 デナリ**という金額、**2 人**でその倍は神殿税として必要になるんですが、本当に、その当時の数日分の平均労働者の賃金分の金額も彼らは持ち合わせていなかったということがここでハッキリ示されています。間違いなく彼らは金持ちではなかったということです。もう貧乏だったという事は間違いありませんが、ただ貧乏だからといって彼らはいつも物乞いをしていたわけはありません。

そしてもう1つ皆さんが疑問に思われるのは、特に**出エジプト記 30 章**のところでも一人一人が贖い銀というものを、神殿税として後に納めるものになるわけですが、それを主に捧げなければならないというところを読んだ時に、またこの箇所を読んだ時に、救いというものはお金で買えるものなのかどうか。疑問に思う人がいるかもしれません。「救いというのはただで与えられるものとは違うのですか。てっきり私は基督教の救いというのは、ただで無料で頂けるものだと思っていました。」その通りです。救いはお金では買えませんが、イエス・キリストにとっては信じられないような天文学的な大きな犠牲を持って、私たちのためにご自身の命の代価をこの救いのために支払って下さいました。ただし、私たちには何もコストがかかりません。私たちにとっては無料です。でも、イエスにとっては有料です。大変高価な、これは地球上のすべての富をかき集めても足りないほどの天文学的な、それ以上の代価を犠牲を払ってこの救いというものが私たちに提供されました。そのことは聖書に書かれているわけです。ですから、救いというのは確かにお金では買えませんが、ただその贖い銀という、その銀という金属は聖書では常に救いの、贖いのシンボル、

象徴として使われる金属です。例えば『**金**』^{きん}というのは神の神性を表す象徴的な金属として使われますが、『**銀**』というものは、これは常に人の命を買い取る身代金などにも使いますが、人を救う時の、または贖い・救いのシンボルとして聖書では使われる金属でもあります。ですからここで宮の納入金や、または贖い銀という話を見る時に、救いというものは決して安価ではなかった。安っぽいものではない、cheap ではないんだということが、ひとつ示されます。非常にこれは高価なものである。イエス・キリストもご自分の命を持って贖いの代価を払って下さったわけです。

で、このことを後にここに登場したペテロが言及していますので、**第一ペテロの手紙 1:18** を開いてみてください。『**18** ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしき生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、**19** 傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。』これは勿論キリストの命ということです。十字架の上でイエス・キリストの命が私たちを贖い出すために、永遠の滅びから救い出すために、罪の奴隷から解放するために支払われたわけです。それが尊い血です。それが命の代価のことです。それが贖い銀と呼ばれるものであります。

で、またテキストの方に戻って頂いて**マタイ 17:25**の方に目を移して頂きたいと思います。『彼は「納めます。」と言って（ペテロはついちょっと立場において分が悪かったのか、「納めます。」とついお金もないのに、神殿税の徴収者に対して思わず口から出ってしまったわけです。で）、**家にはいると、先にイエスのほうからこう言い出された。**（これが私たちの主です。何も私たちが口に出す前から、悩みを打ち明ける前から、イエスの方から先にイニシアティブをとって、先手を取って切り出して下さいます。イエス・キリストと共に居ると、“後の祭り”という事はありません。もう手遅れです、ということありません。常にこの方は先に歩いて下さり、先にイニシアティブを取って動いて下さるお方です。備えて下さるお方です。遅れを決してとる方ではありません。ペテロはまだ何も言っていないのに、何も聞いていないのに、イエスの方から先に言い出されました。最初からイエスはすべてご存知であります。

で、イエスは逆にペテロに質問します。)**「シモン。**（これはペテロのことです。ペテロというのはシモンにイエスがつけたあだ名のことです。シモン、) どう思いますか。世の王たちはだれから**税や貢**を取り立てますか。自分の子どもたちからですか、それともほかの人たちからですか。』イエスの質問の答えは明らかです。一目瞭然であります。王は自分の子供から税など取り立てはしないと。誰から取るのかは明らかだということです。

で、**26 節**で『**ペテロが「ほかの人たちからです。」**（その通りですね。）と言うと、**イエスは言われた。「では、子どもたちにはその義務がないのです。」**』と。「ペテロ分かりましたか。」とイエスは言います。「あなたは一体何者であるのか、自分が何者であるのか、分かりましたか。あなたは王の子供です。そして私は一体誰なのか。私は王の王であると。私が王であって、あなたが王の子供であるならば、税金を徴収される事は全くもってナンセンスな話だよ。」ということが、イエスの言わんとしていることであります。

で、**27 節**に『**しかし、彼らに**（この神殿税の徴収者たちに対して、彼らも役人ですから、公務員ですので仕事があるわけです。彼らに）**つまずきを与えないために、湖に行って釣りをして、最初に釣れた魚を取りなさい。その口をあけるとスタテル一枚が**（これも*印が付いています。スタテルというのは、丁度二人分の 4 ドラクマ、4 デナリ。イエスとペテロの神殿税というふうな額となっています。そのコインが 1 枚）**見つかるから、それを取って、わたしとあなたとの分として納めなさい。」**』と。ここで非常に興味深いことに、イエスは自分の手の中から 1 枚のコインを新しく生み出すこともお出来になったわけですから。そのような目を見張るような奇跡をイエスは行うことが出来ますが、敢えてそれをせずに「**湖に行って、ガリラヤ湖に行って釣りをするように。**」と言いました。口語訳聖書には、この部分を『**つり針をたれなさい。**』と訳していますが、そちらの方が正確であります。正確に直訳で『**釣りをしなさい。**』というところを訳しますと、『**つり針をたれなさい。**』この命令は大変興味深いものであります。と言いますのは、当時ペテロは皆さんもご存じのように、もうプロの漁師でありましたので、プロの漁師というものはつり針など使いません。それは素人のやることです。またはルーキーのやることです。プロの漁

師は船と網です。つり針などたれないものであります。つり針をたらずのは、ルーキー、初心者、または素人のやることであります。プロである彼がそんな釣り方は普通しないわけですが、敢えて「それをしなさい。」とイエスは言われました。で、それに対してペテロは、素直に、謙虚に従いました。プライドもあったかもしれませんが。人からどう思われるか、気になったかもしれませんが、それでもイエスの言われる通りに謙虚に素直に従いました。ペテロがつり針を持って歩く姿を漁師連中、他のプロの連中が見たらどう思うでしょうか。「あいつ一体何をやっているんだと。」そんなふうなささやきも、噂も、もしかしたらコソコソ話されている、そんな場面にも遭遇したかもしれませんが、それでもペテロは従いました。

で、最初に釣れた魚の口からで、スタテル 1 枚、4 デナリがコインとして 1 枚見つかるから、それを私とあなたとの分として彼らに納めなさいと。ちょうどぴったりの額が必ず見つかるからという、これも 1 つの奇跡であります。ペテロの釣り上げた 1 匹の魚の口の中から宮の納入金が満たされたという奇跡ですが、ちょっとあまり派手でない地味な奇跡だと思かもしれませんが、私はこういうのが大好きなんです。ですから敢えてこのテキストを選ばせて頂きました。実はこの記事はマタイだけが記録しています。マタイの福音書にしか見られない記事であります。で、皆さんもご存じのようにマタイというのは元取税人です。税金の請負人、徴収者だったわけです。ただしマタイの場合はローマ帝国のために働く官吏であって、神殿税を納めるようなユダヤ教徒の公務員ではなかったわけです。むしろ同胞から税金を巻き上げて、さらにそこに上乘せをして、自分の懐に入れて私腹を肥やす。そのようなマタイのような取税人は、“ローマの犬”“罪人”。そして仲間外れにされて、金の亡者ということで同胞からは忌み嫌われていたわけですが、ここの宮の納入金を納める人たちはそのような人たちではありませんでしたが、マタイは元々税金を集めてまわっていましたので、この税金の徴収に関してはとても興味があったということが分かります。

そしてここで登場する魚も、後に有名になりまして、ペテロが釣った魚。そこでちょっとした奇跡が起こったということで、ガリラヤ湖には今でも“聖ペテロの魚”と呼ばれるものが泳いでおります。それは”St. Peter’s fish”と言って今でもガリラヤ湖で釣れる魚で、皆さんにお配りしている週報にも少しその魚のことも触れました。食べることも勿論出来る魚です。この 1 つの奇跡から、ペテロが釣った魚が後世にも語り継がれて、名前も“聖ペテロの魚”と名付けられるほどであります。

にもかかわらず、あまり多くの人はこの記事、この故事から多くのことを学んではいないようであります。今から多くのことを皆さんにお話ししたいと思っておりますけれども、是非聞き逃さないで頂いて、全部頭の中に詰め込むようには言いませんが、その沢山語る中で 1 つでも良いですから、是非これは自分に必要な話だったと最後納得してお帰り頂ければ幸いですと思っております。いくつかこの奇跡から私自身が示されたことを今ポイントを挙げながらお話ししていきたいと思っております。この一見地味だと思われる奇跡ですが、目を見張るべき事実がここには含まれております。

まず第 1 点として、イエス・キリストが行われた^{あまた}数多の奇跡の中で、おそらく数百数千数万、聖書に記録されているのは全てではありませんが、沢山の奇跡をイエスは行われたこと、これは間違いありません。ヨハネの福音書にも、いちいちそのイエス・キリストなされたことを記録したら、もう 1 冊の本ではとても足りないということも書いてあります。世界中の図書館を持って、とてもイエスの言行録を記録することは出来ないとすら言われていますが、その中で厳選されてセレクトされたイエス・キリストの奇跡の記録の中で、ここに書かれているストーリーというのは唯一実はお金にまつわる奇跡であります。沢山の奇跡をイエスは行われましたが、その中でたった 1 つだけ、この箇所だけお金絡みの奇跡であります。ということは、お金絡みでない奇跡をほとんど行ったということでもあります。でも、今日多くの教会では、お金の話ばかり致します。奇跡といっても、それはお金絡みの奇跡ばかりであります。如何にして金持ちになるか、ビジネスで成功するか。献金のアピールがなされたり、お金が常に話題となって、金臭い(魚臭いではなくて)ような教会がいっぱいあります。そのような教えを皆さんにも何回か伝えたことがあると思っております。キリスト教界内で“繁栄の福音”と呼ばれるような教えが流行っております。繁栄する、そのための福音。金持ちになる、健康になる、人生で成功する。そのための福音であると。聖書をまるで成功の哲学のテキストのようにして、ビジネスで成功

するためのテキストのようにして使われ、それが本となったり、セミナーとなったり、それが説教で教会の講壇から語られることが多くあります。ただ覚えて欲しい事は、イエス・キリストはその沢山の数多の奇跡の中で、たった1つだけお金にまつわる奇跡を行われて、それがここにのみ記録されております。

で、**使徒の働き 3:6**も参考までに開いて頂きたいと思います。ペテロが登場しますので、注目して頂きたいと思います。これはイエス・キリストがもう十字架につけられて、葬られて、3日目に甦って、40日間甦った姿を弟子たちの前にも現して、時には500人以上もの兄弟たちの前に復活の姿を現して、復活されたという事実を証明されて、その後天に上げられました。その後に聖霊が弟子たちの上に降って教会が産声をあげました。エルサレムにその最初の教会が誕生したのですが、その頃の話です。もうイエスは天に上げられました。ただしイエスの御霊が、聖霊が弟子たちの内に住んで、力強く働いている姿が見えます。言わば弟子たちを通してイエス・キリストが力強く今も生きて働いておられるという姿の記録であります。その中で、前後も是非読んで頂ければと思うのですが、生まれつき足が効かない、足の萎えた身体障害者の人が物乞いをしていたわけですが、その前をペテロが通ったわけです。で、物乞いをしている人はもう絶望的ですから、もうただただ神殿に来る人たちからお金を施してもらおう、それしか生活の手段がなかったわけです。当時は社会福祉システムなんていうものはありませんでしたから、身体障害者はもう物乞いに頼るしかない。そんな中でペテロたちにもこの男は物欲しそうな目をしていただけですけども、それに対して**6節『すると、ペテロは、「金銀は私にはない。(注目して下さい。金銀はこの時ペテロにはなかったんです。マタイ 17章の段階でも、イエスと一緒にペテロが居た時もお金はなかったんです。税金を納めるようなお金も持ってなかったんです。でも、この時点でもお金を持っていません。教会が形成されました。ペテロは教会のリーダーです。弟子たちの頭です。にもかかわらず、そのペテロには金銀はないと。)しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。』**私たちにもお金はないかもしれませんが。私には金銀はありません。でも私には金銀よりもはるかに素晴らしいものがあります。それがイエス・キリストというお方です。イエス・キリストのうちにすべてがあります。ですから私たちクリスチャンは世界で一番豊かな者たちです。銀行口座にはなげなしの貯蓄しかないかもしれません。もしかしたら赤字かもしれません。でも私たちイエス・キリストを信じる者には、すべてがあります。イエス・キリストの内にあるものは、これはお金では買えないものです。もちろんクリスチャンは皆貧乏でなければいけないと言っているのではありません。ただ、お金以上のものを私たちは与えられているということです。お金がないから私たちは何も出来ないとか。「お金がないから不安です。心配です。」という事はクリスチャンにはありません。そして「お金がないから神様に対して何もお仕え出来ない、捧げられない。」と言ったら大間違いです。「**金銀は私にはない。**」とペテロはハッキリ言いました。「お金がなければ教会をどうやって回すんですか。お金がなくては奉仕だって出来ないでしょう。」そんな事はありません。私たちにはイエス・キリストが与えられています。で、ここでもう一度話を戻していきたくと思いますが、**マタイ 17章**に戻って頂いて、次のポイントです。1番目のポイントは、イエスが行われた奇跡の中で唯一お金絡みの奇跡がこの箇所であったということ。ですから私たちはお金絡みの、お金にまつわる話ばかりを教会では避けて、なるべくしないということもここから教えられます。

で、2番目にイエス・キリストが行われた奇跡の中で唯一、これはご自身のために行われたものである。イエス・キリストのために、勿論ペテロのためにでもありましたが、珍しい奇跡です。イエスのニーズのためにイエス自身が奇跡を行われたという非常にユニークな箇所でもあります。自分の必要をまかなうために行われた奇跡というのは、多分これ以外にはないと思います。40日40夜飲み食いせずに荒野に居た時に、イエスはサタン、悪魔の誘惑を受けました。石はゴロゴロしておりますけれども、食べ物は何もありません。そこへサタンが来て「お腹が空いているだろう。その石をパンに変えてみなさい。」勿論イエス・キリストは、その石をパンに変えることはいくらでも出来たわけですけども、敢えてサタンの誘惑にはのりませんでした。イエスは石をパンに変えることが出来る、自分の必要をいくらでも満たすことが出来るはずなのに、敢えて行いませんでした。イエスはただのミラクルメーカーではないんです。私たちのために十字架にかかって死んでくださって、罪を全て贖い清めて、その十字架の死だけが唯一の救いの道であることをイエスをご存じでしたから、ただ真新しい、またはセンセーショナルな奇跡を行って、人々の関心を自

分に向けて、多くの信奉者たち、大教団、大宗教、そういったものを作ることがイエスの目的ではありませんでした。ただの人気取りではなかったんです。イエスは 1 人でも多くの人を永遠の滅びから救いたい。ただその一心でこの地上に来られたので、奇跡を行なう力もありましたけれども、十字架から降りることすら出来たんですけれども、敢えてそれをしませんでした。それよりも大切な働きがあったからです。

で、ここでも税金を納めるか、納めないのかという話をされることも本来は心外なことでありましたけれども、イエスは敢えてここで素晴らしい御業をなさいました。意図的に税金を払っていなかったわけではないんですけれども、本来は払う立場にはないと。王であって、あなたは王の子供であると。ですから本来はイエスにとってはこれは必要なことではなかったんです。税金を納めるのはイエスにとっては必要なことではなく、またペテロにとっても同様だったんですけれども、でも敢えて必要のないことであつてもつまずきを与えないためにこの奇跡を行いました。これも注目すべき点であります。ご自分のためにと言っても、厳密には必要なかったという事はお分かりだと思つるので、むしろここではその税金を納める者たちのつまずきにならないために奇跡を行いました。

今日の多くの教会では、やはり先程もお話ししたようにセミナーや本といったものでも“自分の必要を満たすこと”それをとにかく教えようとしております。先ほどは“繁栄の福音”という言葉 皆さんにお伝えしましたが、他にも“信仰の言葉”と呼ばれるものがあります。英語では“Word faith”と言うもので、信仰の言葉を口にして、それを頭の中でイメージして、それを具体的に映像化して、ビジュアル化して、念じるわけです。これは企業でも行われている自己啓発と同じような考え方です。例えば「ポジティブ・シンキング」”positive thinking”というものがあります。可能思考というものです。「私には出来るんだ。私には必ず成功出来るんだ。」ということを自己暗示させながら、そしてそのために自分を信じるというところから信念を強く持って前に進もうとする。それは一見良いように思いますが、そのような自分のニーズを自分自身で満たすように、そしてそのような教を教会でも残念ながら聖書の言葉などを借用しながらも教えられてしまっています。でも、イエス・キリストはご自分の必要のために何もなさらなかったということを知って欲しいと思います。教会は自分の必要のために躍起になってしまうかもしれません。クリスチャンは個人個人の、自分の必要のために教会に集まって、何とか自分の悩みが解決するように、問題が解決するように、自分の経済難が克服されるように、健康が得られるように。そんなことを求めて教会に来る人たちも大勢おります。最初はそれで良いかもしれませんが、でも、教会はそのような御利益宗教で多くの人々の必要に応えるようなところではありません。ここでイエス・キリストが敢えてご自分のために 1 つだけ奇跡を行ったということです。でも、厳密にはイエスのためではなくて、むしろつまずきを与えないため、他者のためであつたということです。必要のない事でも、主がつまずきを与えないために必要を備え、奇跡も行って下さるということ。

で、3 番目のポイントとしてイエスが行われた奇跡の中で唯一、これは 1 匹の魚を用いたものであるということ。他の時にもイエスは魚を使うんですが、その際は 1 匹ではありません。沢山の複数の魚を使いました。例えば大勢の群衆を相手に 5,000 人の給食と呼ばれるような目を見張るような奇跡を行われました。**マタイの福音書**の中では **14 章**のところで既にそのところは見たわけです。男の数だけで 5,000 人。女・子供の数は含まれていませんから、1 万 5,000 人から 2 万人は居たと思います。全員空腹でした。その時にイエスは少年の 1 つのお弁当を用いて、5 つのパンと 2 匹の魚を使ってこれらのおびたしい群衆に分け与えました。彼らの空腹を満たすだけでなく、お土産までつけて彼らを帰らせました。で、同じく**マタイの福音書 15 章**のところには 4,000 人の給食の奇跡も記録されています。この時には 7 つのパンと魚を使いました。日本語の聖書ではただの『魚』と書いてありますから、1 匹の魚に思うかもしれませんが、実はこの『魚』という部分は複数形になっております。ですから 2 匹以上という事は確かです。ただし、今朝のテキスト、**マタイ 17 章**では、1 匹の魚だけ。しかもこれは死んだ魚ではありません。生きた鮮魚です。それが使われた珍しい奇跡だと言えます。

聖書の注解者の中には、イエス・キリストが行われた奇跡をなるべく自分たちの頭の中で、理性の範囲で受け止めよう、解釈しようという人たちがおります。例えば、5,000 人の給食は、これは奇跡でもなんでもないんだと。大勢の群衆を前にして近くには食料品店もない。へんぴなところである。誰かこの群衆に食べ物を分けてくれる人はいない

だろうかと呼びかけたところ、1人の少年だけがイエスのもとにやって来て自分の弁当を差し出したと。5つのパンと2匹の魚しか入っていない貧しい食べ物だったと。でもその姿を見て大人たちは心痛めて恥ずかしくなって、子供ですら自分の弁当を分け与えようとしているのに自分たちは何をしているのかと言って、恥ずかしそうに自分たちの懐の中から弁当を取り出して、皆で分け合って、結果的には皆お腹いっぱいになりましたと。こういう話だと。奇跡でもなんでもない。当時は日本の着物のようにして、裾の中に物を入れていました。外に出る時にも食べ物を、お弁当を裾の中に入れていたわけです。ですから食べ物を持つてかどうかは外からは分からないわけです。懐の中に丁度隠されているような感じですので、でも少年が取りだしたことで銘銘が取り出して、隣の人・周囲の人と分け合って、結果的に全員のお腹が満たされた。ただそれだけの話だというふうに解釈する聖書注解者、聖書学者たちがおります。それはあくまで奇跡というものを信じられない、信じ難いものとして、むしろ人間のちっぽけな頭の中で、人間的に、また合理的に理解しようと試みたものでありますけれども、ただ聖書の記述を注意深く読めば、そんなことはひとつも書いてありません。これは擬もない奇跡であるというところは、聖書からも窺い知れます。聖書には確かに奇跡だと書いてありますが、その人たちはさらに進んで「否、聖書は、これは人間が書いたものだ。神の言葉ではない。」というようなことまで言い出してしまいますので、そうなるとうどどちらが神様か、分からなくなってしまいます。いずれにしてもこの奇跡も同じように合理的に人間的に理解しようとして、ある注解者は「ペテロはこの時ガリラヤ湖に網を投げて、そこに魚が数匹入って、しかも古いサンダルだとかさらにはコインまで、硬貨までその中に入ってきたと。で、その中からペテロは税金を納めたんだ。」というふうな理解があります。だから奇跡でもなんでもない。日常のありふれた生活の中から神様が必要を満して下さった。ただそれだけの話である。という教えが、そういう解釈がなされるわけですが、ただここにはハッキリと「1匹の魚の口の中から1枚のコインが見つかった。」としか書いてありません。網なんか投じたとは書いてありませんし、あくまでつり針をたらしたということです。合理的に説明がつかないことをなんとかして、神の言葉を信じられない、奇跡を信じられない人たちは、そのように歪めて曲解して理解しようします。私たちはどうでしょうか。聖書の言葉を神の言葉として確信しているでしょうか。それとも、これは人が書いたものだ、頭に収まりきれないものは、合理的に理解出来ないものは受け入れ難いとしてしまっているでしょうか。

で、4番目のポイントとして、イエスはペテロのために1つの硬貨を、コインを1匹の魚の口の中に備えたわけです。これはペテロのためにイエスが個人的に行われたいくつかの奇跡のうちの1つであります。唯一ではありません。いくつかの奇跡のうちの1つであります。イエス・キリストはペテロのために個人的に奇跡をいくつか行いました。最後にその個人的にいくつかイエスがペテロのために行った奇跡を見ながら、今日ここで開いたテキストもそのうちの1つとして皆さんの中で、頭の中でも結構です。一度整理して頂いて、イエスがペテロのために個人的に奇跡を行われた。そして今日イエス・キリストは今も生きていて、あなた個人のために沢山の奇跡を行って下さいます。ペテロにも行って下さったように、あなたにもイエス・キリストは奇跡を行って下さいます。はじめの奇跡というのは**マルコの福音書 1:31**です。時系列で追って行きたいと思います。これはペテロ個人というよりもペテロのしゅうとめ「**姑**」のためにイエスが個人的に行われた奇跡です。『**イエスは、彼女に(これはペテロの姑です。)近寄り、その手を取って起こされた。すると熱がひき、彼女は彼らをもてなした。**』とあります。ペテロの姑は熱病で苦しんでおりました。でもイエス・キリストによって触れられて、一瞬にしてその熱病は癒されたんです。で、癒された途端に彼女は周囲の人たちに仕え始めました。奉仕をし始めました。このようにイエス・キリストによって癒された者は、救われた者は、助けられた者は、触れられた者はその途端に、その直後に周囲の人たちに仕え始めます。奉仕をし始めます。もてなしを始めるわけです。MGFにおいても、多くの奉仕が多くの人たちによってなされています。ある人たちから見れば、こんな忙しい時とか、あんなに遠くからとか、こんなに早くからとか、こんなにお金をかけてとか、週に何回もとか、気でも狂ってるんじゃないかとか。そのぐらい教会で熱心に働いているそういう姿を見て、もしかしたら頭をかしげて、「この人たちは一体どうしちゃったのか。」そんなふうに理解も出来ないというふうな姿も見られる方もいるかもしれませんが、実際に私たちが教会で奉仕するということはこのペテロの姑と全く同じ体験をしているからだということを覚えて

欲しいと思います。それは、誰から命じられてとか、強制されて、強要されて。または、これは当番だから、持ち回りで、他の人がやるから私もやらないと、私がやらなければ他の人にしわ寄せが行くから。そういうことでやっているではありません。あくまで私たちはイエス・キリストに出会って、この方に触れられて、癒されて、元気にされて、そして喜びが与えられたので、私たちはもうこの方に仕えざるを得ないという状態に変えられてしまうわけです。イエス・キリストに救われたことでもう感動しているわけです。感謝感激状態です。ですから、仕えざるにはいられない。捧げざるにはいられない。強制強要は全く、考えも頭の中によぎりもしません。これは喜んで私が自発的にやっていることなんです。そのように、ペテロの姑のように私たちもイエス・キリストに触れられると変えられます。で、勿論それは重荷にはなりません。疲れることなどありません。もし疲れているならば、もしそれが面倒だとか、または「自分ばかりやって他の人は何もやっていない。」そんなふうな思いが少しでもあなた内にあるならば、もう即刻その場でその奉仕はやめるべきです。続けるべきではありません。イエス・キリストはそのような奉仕を喜ばれません。

次に、2番目にイエスがペテロに個人的に行われた奇跡としてルカの福音書 5:3『イエスは、そのうちの一つの、シモンの持ち舟にのり(シモンというのはもちろんペテロのことです。)、陸から少し漕ぎ出すように頼まれた。そしてイエスはすわって、舟から群衆を教えられた。』イエスはペテロの持ち舟を一艘借りました。で、少しガリラヤ湖の方に漕ぎ出して、そこからそこを説教台のようにして、自然の音響システムを利用して、多くの群衆たちに語りました。当時はマイクなんかありません。このガリラヤ湖が、またボートがマイクの代わりをして、大勢の群衆たちに声が響き渡るように用いたわけです。で、その後にイエスはペテロに「湖の方に漕ぎ出して、深みに網を下ろしてみなさい。」と。その前後を読んで頂くとこのストーリーが、馴染みのない方は良く分かると思うんですが、「湖の方に漕ぎ出して、深みに網を下ろしてみなさい。」と。でも勿論ペテロたちはプロの漁師ですから、その前に実は夜通し働いて魚が1匹も取れなかったというそんな思いをしている時に、日中に、普通魚は昼間は取れません。そして、深みに網を下ろしなさいと。プロからすればそんなナンセンスな、そんなバカな、これは素人の浅知恵だと思わないわけですが、それでもペテロは頭では理解出来なくても、合理的ではなくても、自分の経験からすれば全く反することであっても、イエスのおっしゃる事だから従ってみましょう。とりあえずは、という感じですね。で、実際に「お言葉通りに網を下ろしてみましよう。」と言って、下ろしてみたところ考えられないような魚たちが、おびたしい数が、もう一艘ではとても収まりきらないような魚が取れたわけです。このことから何が教えられるのか。またそれぞれ皆さんにも考えて頂きたいと思います。ペテロは主に一艘のボートを貸しました。貸しましたけれども、主は決して私たちに対してもそうですが、貸しを作らないお方です。「私はこれだけのことを捧げました。これだけのことをしました。だからこれだけの見返りを下さい。」なんて言うことは、私たちは主に対しては言えません。ペテロは一艘のボートを貸しただけですが、驚くことに主は一艘のボートではとても積み切れないほどの大量の魚を下さいました。つまり私たちは主に対しては貸しを作ることは出来ないし、主は借りを作ることは致しません。これが私たちの主です。ただの御利益の神ではありません。「お布施をしたから、お参りをしたから、だからこれだけのことを、見返りを下さい。私の頑張りを見て下さい。報いを下さい。」と言うかもしれませんが、そんな事は私たちの主はいたしません。人間に仕える神ではありません。その神が私たちのためにこの世に降って来てくださって、そして私たちの命を救うために、永遠の滅びから贖い出すために、ご自分の命を捧げられた方です。その方が今私たちのところに共におられます。そしてペテロと同じように、私たちもこの方と自由に会話が交わせます。あなたの持ち物、あなたの能力、体力、また資力(お金も含めて)、それらを主に使って頂くことが出来ます。ペテロのように主が使いたい、借りたいと言え、私たちはそれを喜んで差し出すことが出来ます。ただし、それは私たちが見返りを得るためではありません。むしろ見返りは想像もつかないほどの見返りを頂くことは、これは期待出来ることでもありますけれども、ただ覚えて欲しい事は、主には借りを作ることは出来ない。見返りを求める目的で私たちは主にお仕えする、主に捧げるということは致しません。そして深みに漕ぎ出す。これは皆さんがもしかしたら、ある程度限界を設けてしまっ、これ以上先には行かない、進まないという1つの線引きをしてしまっているかもしれません。これ以上は。信仰の深みにまだ進もうとしていない人もおります。でも、そこには間違いなく獲物があります。魚がいるんです。

3 番目にイエス・キリストがペテロのために個人的に行われた奇跡として、それは**マタイの福音書 14:22～23** のところを見て欲しいと思います。『²²それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて(意図的に)舟に乗り込ませて、自分より先に向こう岸へ行かせ、その間に群衆を帰してしまわれた。²³ 群衆を帰したあとで、祈るために、ひとりで山に登られた。夕方になったが、まだそこに、ひとりでおられた。』その続きは、また知らない方、馴染みのない方はご自分でお読み頂きたいと思います。夜になって、嵐が吹いて、向かい風状態です。視界はもうゼロと言っていると思います。暴風だけではなくて、波も大きくなってきます。時間は最も暗い所謂丑三つ時です。深夜の時間帯です。3時から6時という最も暗い時間帯にあります。向かい風で一生懸命弟子たちはプロではありませんでしたが、漕ぎあぐねいでおりました。で、その時に、そんな真っ暗闇の中で、嵐の中で、誰かが自分たちの方に水の上を歩いて近づいて来る。「これは人間ではない。幽霊に違いない。」と、すっかりと怯えきってしまったわけです。その弟子たちに対してイエスは「しっかりしなさい。わたした。恐れることはない。」と声をかけられました。ペテロがその時に「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」と、ペテロらしい質問をしました。他の弟子たちはもうそれどころじゃありませんが、で、イエスはそんなペテロに対して「来なさい。」とおっしゃって下さいました。で、実際にペテロはそのボートの中から出たんです。驚くことにペテロはその嵐の湖の湖面の上に立とうとしたんです。そして実際に立ったんです。そして実際に何歩かは歩いたんです。でもそれが勿論普通ありえないことで、つい現実に戻ってしまって、それまではただイエスのことを見て、イエスの命令に従って踏み出したわけですが、でも周りを見てしまったんです。周りは真っ暗闇。暴風が吹き荒れています。で、波は荒いです。見てしまった途端に段々と沈みかけてきました。で、溺れそうになった時に「主よ。助けてください。」とペテロは叫びました。聖書の中に記録されている最も短い祈りと言って良いかもしれません。その時に主は「それ見たことか。私から目を離れたからこうなるんだ。」とは言いませんでした。黙って直ぐに手を差し伸ばして、ペテロをその沈みかけた状態から引き上げて、驚くことにペテロの手を取って、手を繋いで一緒に二人で水の上を歩いて弟子たちの待つボートのところまで連れて来て下さいました。で、二人がボートに乗った途端に^{なぎ}嵐になったんです。嵐は止みました。これも驚くべき奇跡です。ここからも沢山のことを教えられるかと思いますが、ペテロが個人的に体験したことです。ペテロの失敗ばかりが厳しく糾弾されそうですけれども、実際に水の上を歩いたのはペテロだけです。確かに周りを見て怖くなって沈みかけるような過ちを犯しました。でも実際にイエスの言葉に従って、イエスに期待をして歩き出したのは、ペテロだけ。そしてイエスと一緒に水の上を歩いたのもペテロだけです。おそらく人類史上水の上をこのように歩くことが出来たのは、ペテロだけだと思います。特別な体験をしました。

次に 4 番目のイエスがペテロのために個人的に行われた奇跡ですが、それはペテロが剣で傷つけてしまった人を癒されるという奇跡でありました。イエス・キリストが十字架刑にされる前夜、ゲッセマネの園というところで、イエスはペテロとヤコブとヨハネの 3 人で一緒に祈りました。しかし、イエスが血の汗を流しながら「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください。」と祈っているその最中に、彼らは眠りこけてしまいました。で、目覚めて見たら周りはローマ兵や神殿警察で取り囲まれていたわけです。そしてペテロは思わず敵が捕えに来たと思って、その先頭に立っていた大祭司のしもべマルコスという人に剣で打ちかかってしまうんです。このことは**ヨハネの福音書 18 章**にも書いてあります。また**ルカの福音書 22:51**のところはメモをして後で開いて見て欲しいと思います。(『⁵¹するとイエスは、「やめなさい。それまで。」と言われた。そして、耳にさわって彼を直してやられた。』)ペテロは剣を抜いてそのマルコスに打ちかかりました。勿論ペテロの狙いは脳天だったんです。でもペテロはただの素人、兵士ではありません。結局脳天を外して、このマルコスの右の耳をそぎ落とすに終わってしまったんです。勿論そんなことをすれば即刻その場でイエス一行は殺されていても不思議ではありませんでしたが、イエスはそこで「**剣を収めなさい。**」と言われて、即座にそのそぎ落とされたマルコスの右の耳を拾って、また再び元の位置に戻して癒されました。馴染みのない方は**ヨハネ 19:10**、そして**ルカの福音書 22:51**を見て頂ければ、いまお話したことは確認出来ます。で、これは興味深いことにイエス・キリストが十字架刑にされる前に行われた最後の奇跡です。復活されてからイエスは奇跡を行いました。で

も復活前に、十字架刑で殺される前に行われた地上における最後の奇跡が、実はそれだったんです。ペテロが打ちかかって敵の右の耳をそぎ落として、そしてその耳を元に戻して癒された。それが、イエスが地上で行われた最後の奇跡と言っていると思います。で、その意味するところは何なのか。弟子が剣で人を傷つけて、その傷つけられた人を師匠が癒すというものであります。聖書で剣というのは御言葉のシンボル・象徴でもあります。『**神の言葉は生きていて両刃の剣よりも鋭い。**』とか、または『**御霊による剣**』これは御言葉であるというふうにも聖書は言っております。私たちがイエスの弟子として、この剣で、御言葉で多くの人をバッサバッサと切りつけて、切り捨ててしまうものであります。しかしそのような者たちをイエス・キリストが癒して下さる。これは素晴らしい奇跡です。考えて欲しいと思います。私たちはどれだけの人たちを御言葉によって、聖書の言葉を引用して、聖書の言葉を利用して傷つけてしまったのでしょうか。勿論真理を語れば、それは人の心にはグサッと突き刺さります。でも、不用意な傷つけ方を避けなくてはなりません。メスを入れて病巣を取る。それは必要な傷かもしれません。でもただ単に剣を振り回して人を癒す目的でもなく、治す目的でもなく、ただ切り捨てるために御言葉の剣を振り回す。これはあってはならないことです。「**剣を収めなさい。**」とイエス・キリストは言われます。もし皆さんの中に聖書の言葉でやたらめったら周りの人をバッサバッサと切りかかって、打ちかかっているような人がいるならば、**主**が今あなたに「**剣を収めなさい。**」と言われている事を覚えてほしいと思います。

で、5番目にペテロが経験した奇跡なんですけれども、これは**使徒の働き 12章**に、そこにはヘロデという人が出てきます。これはヘロデ大王ではなくて、ヘロデ大王の孫のことです。ヘロデ・アグリッパ一世の事ですが、このヘロデという人が使徒ヤコブを捕えて剣で殺すということを行います。処刑をしてしまうんです。伝承によれば使徒ヤコブ（これはヨハネのお兄さんのことですが）は、ノコギリで生きたまま真っ二つに切られて殺されたと言われています。で、そのヤコブの処刑によってユダヤ教徒の人たちが喜んだところを見て、ヘロデはユダヤ人たちの関心を買おうとして、「であるならば、人気取りのために使徒の頭であるペテロを捕えて彼も殺そう。そうすれば自分は不動の人気を得るから。不動の地位を得るから。」ヘロデはあまりユダヤ人たちからは良く思われてなかったわけです。不人気だったので、ペテロをとらえて殺せば、これでユダヤ人たちの心は掴めると思ったわけです。で、ペテロは実際にこのヘロデに捕らえられてしまいます。捕らえられて、牢に投げ入れられて、4人1組の兵士たちに囲まれて、鎖でそれぞれ繋がれて、2人の兵士たちの間にペテロは置かれることになります。で、次の日の朝なり、次の日になったら、明るくなったらペテロは処刑される予定でありました。あなたがただイエス・キリストのことを宣べ伝えているということだけで捕まって処刑されるなんていうことになったらどうでしょうか。その晩はあなたは眠れるでしょうか。翌日にはもう処刑されるんです。「なぜ私はこんな目に遭わなければいけないのか。理不尽だ。これは冤罪だ。」恨み辛みや理解出来ないことに苦悩して、眠れないかもしれません。隣には兵士がいるわけです。にもかかわらずペテロはどうしていたかと言うと、もうぐっすり寝ていたわけです。次の日に殺されることが分かっているけれども、それでも彼は熟睡しておりました。これも詳しくは**使徒の働き 12章**を読んで頂くと分かりますけれども、そこでペテロが**第一ペテロ 5:7**で後にその時の体験も勿論踏まえてのことだと思えます。こういう言葉を語っております。『**あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。**』あなたがたの思い煩いを、心配事をいっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださる、ケアしてくださる、とあります。ここで『**ゆだねる**』という言葉に注目して頂きたいと思えます。これはギリシャ語では、特に重い石だとか、または車輪といったものを上に転がす、その時に使う言葉です。丘の上なんか転がしていく時に使う言葉なんですけれども、イエス・キリストの元へあなたのその大きな石を、大きな問題を転がして行きなさい、ということを行っているわけです。そうするとあなたはこのイエス・キリストにケアして頂けるという約束であります。そのためにはイエスの元まで、丘の上はこの重い物を押し上げるように転がすように、または持ち上げるようにして行かなくてははいけません。で、丘の上までその大きな石なり問題を、重荷を持って行くとうなるのか。車輪のようなものを想像して頂いても構いません。荷車を想像して頂いても構いませんが、丘の上までなんとか持って行ったらどうでしょうか。今度は丘の上からその石は、また麓の方へとゴロゴロ転がり落ちて行くことが、想像出来ると思えます。で、そのことを今皆さんにも頭の中にイメージ

して頂きたいと思います。「今私はこのような大きな問題を抱えています。これが私にとっては重荷なんです。でも聖書の約束にあるように、私はこれをあなたにゆだねます。ゴロゴロ転がしながらイエスの元に持って行きます。で、持って行ったと思ったら、また同じような問題が自分の元にまた転がり落ちてくるように。折角この問題のために祈ったのに、また新たな問題が自分のところに転がり落ちてきたようだ。一体何なんですか、これは。」と思っている方も、実際にその渦中にいる方もいるかもしれません。ただ聖書ではこの『ゆだねる』というのは、1回限りの行為ではなくて、継続的な行為のことを指しております。ですから問題を主の元へ継続的に押し上げていく、持ち上げていく。それが『ゆだねる』ということです。で、持ち上げて、ゆだねて、押し上げていくと、また新たな問題があなたの元に転がり落ちてきます。その繰り返しであります。1時は平安が受けられます。1日とか、または1週間とか、1カ月間。「ああ、良かった。この問題は主にお任せして、もう私はこれで安心。ほっとしました。」しばらくは平安でいられます。でもまた新たな問題があなたのところに転がり落ちてきます。そうするとあなたはすっかり取り乱して、まるで平安がどこかへ吹っ飛んでしまったかのように。恐れ、そしておじ惑ってしまいます。「なぜ神様はこんなことを私にされるのか。理解できません。折角あなたの元に持っていったのに、また石が私のところに転がって来るなんて。こんなことに意味があるんですか。こんなことの繰り返し、もう嫌です。疲れました。」と言う人もいるかもしれません。

まあ、そのために、そのような思いをしている方のために、最後に理由というものを。神様が取ってそのことをあなたに求めておられる、その意味というものをお伝えして終わりたいと思います。ペテロは勿論この意味を知ったわけです。で、そのことを説明する上で1つのたとえといいますか、これは有名な話なんですけれども、古代ギリシャのオリンピックの大会で第61回から第66回までレスリングにおいて連続優勝したミロという人がいます。クロトナのミロと、どこかで聞いたことがあるかもしれません。で、このミロという人は少年時代に子牛を肩に担いで毎日1キロの道のりを牧場まで歩いたそうです。でもその子牛の成長は早くて、あっという間に1年2年、そして気がついてみたら大人の牛になっていたわけです。それでもこのミロという人は、少年時代から毎日毎日その大きく成長していくその牛を肩に担いで欠かさず1キロ、道を歩いたわけです。親牛になっても毎日ミロは担ぎ続けました。で、結果的にどうなったかと言うと、ミロの肉体はもう筋肉隆々です。アーノルド・シュワルツネッガーみたいになったわけです。ですから古代オリンピックのレスリングで第61回から第66回まで連続優勝しても不思議ではないような体がそこで形成されたわけです。ミロの強さの秘訣は、少年時代から子牛を毎日欠かさず担いで、子牛が大きくなろうとも、親牛になろうともそれを続けたことにあります。その故事は有名なので、よくギリシャ彫刻でもミロの筋肉隆々の像が作られるわけですが、その像を見て感心した人がいました。1897年にドイツ人の医師のユルゲン・サンドゥーという人が、このミロの彫像を見て「この肉体は素晴らしい。どうやったらこのような肉体になれるのか。」そこで彼は医者ですから、研究を始めたわけです。で、そこで編み出したのは、負荷抵抗トレーニングというものです。バーベルだとかダンベルというものを使って肉体を鍛えあげる、筋肉をつける。今日は、それは当たり前です。所謂ボディービルディングに使われていますが、でもその時代まで、このサンドゥーという人がそれを発明するまでは、実はそのようなトレーニングというのはなかったんです。ミロのケースは、これは伝説でしかないということで誰もそのようなトレーニングをしたことがなかったわけです。でも結果的にはこのユルゲン・サンドゥー自身もそれをやってみて証明して、すごい肉体を自分自身もつくりあげることができました。彼自身のことはあまり良い逸話が残っていないので、参考までに話をさせて頂きましたけれども。そのボディービルディング、今日でもプロのボディービルディングの最高峰と言えば、“Mr. オリンピア”という称号まで与えられます。これはミロから来ているわけです。アーノルド・シュワルツネッガー、シュワちゃんというあの人も、このオリンピアになった人であります。

これである程度私が何を言わんとしているのが皆さんには伝わったかとは思いますが。神様はあなたにすべての思い煩いをゆだねるように、私のところに持ってくるように、持ち上げて転がして丘の上に運び上げるようにしなさい。でもまたそのすぐ後に、その石はあなたのところに麓に転がって落ちてくるわけです。で、またそれをあなたはゴロゴロとまた持ち上げて行く。「意味があるんですか、こんなことに。無意味じゃないですか。価値なんかありませんよ。疲れるだけです。」とあなたは思うかもしれませんが、主はあなたに求めておられる事は、「あなたには霊的ミロになっ

てもらいたい。」これが、主があなたに望んでおられることです。霊的ボディービルダーになってもらいたいということです。聖書では、教会のことを“キリストのからだ”と呼びます。で、教会はキリストのからだとして建て上げられなければならないと言われております。霊的なボディービルディングというのは、教会を建て上げることと言い換えても差し支えないと思います。思い煩いというものを一切イエス・キリストにゆだねてみましょう。それはイメージとしては、重い石を丘の上に転がしながら押し上げていくような作業であります。祈って、祈って、そして信頼していく。で、持ち上げてほっとしたと思ったら、これで軽くなったと思ったら、また再びあなたの元に大きな石がゴロゴロ転がり落ちてきます。そしたらまたそれを続けるんです。毎日、毎日、継続的にです。ゆだね続けるということです。そうすれば主があなたのことを心配して下さる、ケアして下さると約束されています。気がついてみたらあなたはミロのようなスピリチュアルジャイアントになっています。あの時はあんなに弱かったのに、ただの子供だったのに。でも今はあなたはそれを続けたおかげで、負荷抵抗トレーニングを続けたおかげで立派な霊的ボディービルダーになって、もうどんな事でもあなたは背負うことが出来ます。

ペテロもこのことを経験しました。姑の熱病がイエスによって癒されました。そして一昼夜働いても1匹も魚が取れなかった時、イエス・キリストが驚くべきおびただしい魚を船いっぱい、積みきれないほどに与えて下さいました。神殿税の支払いを迫られた時、ペテロは思わず立場的に苦しくなったので「納めます。」と言ってしまいました。でもイエスはそんな彼の立場を鑑^{かん}みて「つまずきを与えないように。」とおっしゃって、間違いを、失言をしたにもかかわらず助けて下さいました。大祭司のしもべのマルコスの右の耳をそぎ落としてしまった時も、取り返しのつかないことをしました。これで弟子も全員イエスと同様に捕らえられて本来は処刑されてしまう、そんな窮地に追い込まれた時にも、イエスはペテロの失敗を埋めて下さるようにして、すぐその場で耳を癒して下さいました。牢獄の中に投げられた時も、ペテロは恐れませんでした。「なぜ自分だけがこんな目に遭わなければいけないのか。」怒りも、憤りも発しませんでした。恨みも、辛みも、苦々しさもありませんでした。むしろスヤスヤと平安のうちに2人の兵士に囲まれながら眠ることすらできました。

ここで皆さんに最後に聞きたいのは、あなたは主に信頼しているのでしょうか。いろいろと今皆さんは重荷を抱えているかもしれません。それは罪の大きな重荷かもしれません。生活上における大きな石かもしれません。これをどこに持って行ったらいいのか。いろいろなところに持って行こうとしているかもしれません。今までもいろいろな人たちに助けを乞うてきたかもしれません。その都度あなたは裏切られたかもしれません。でも、この方はあなたを決して裏切る方ではありません。失望させる方ではありません。「主に信頼する者は決して失望させられることはない。」と聖書に約束されております。この方の元に持っていけば間違いありません。ただ、この方はあなたを強くしたいと願っています。弱いままのあなたで良いということは、この方は願われておりません。あなたにはもっと強くなれる素質がある、ポテンシャルがあるんだと。それをイエス・キリストは私たちのうちに見ておられますので、是非今辛い思いをしている人たち、「もうすっかり疲れてしまった。もうこんな人生の繰り返しはもう飽き飽きした。もう嫌気がさした。」という人もいるかもしれませんが、是非クリスチャンであろうと、ノンクリスチャンであろうと信頼出来る方は一体どなたなのか。そしてあなたもペテロのように失敗をするかもしれません。でも、その失敗はイエス・キリストによって栄光に変えられて、イエスにしか出来ないような働き、あなたが想像も出来ないような奇跡・備え・恵みというものがもたらされますので、是非そのことも期待をして頂きたいと思います。

では今日はこれで終わりたいと思いますので、是非いくつかのポイントを挙げましたけれども、皆さんは今どのような語りかけを受けているか、働きかけを受けているか。最後に考えて頂きたいと思います。ペテロが個人的に体験した事は、あなたにも体験出来ることです。そのことも今から祈る時間を持ちますので、それぞれ心の中に主が今あなたに示されていることをハッキリ見てとったならば、しっかりと信仰をもって受け止めて頂いて、それに応答して頂きたいと思います。